

四国遍路の後背地：〈周辺〉から見る大師信仰と巡礼ツーリズム

門田 岳久（立教大学観光学部准教授）

The hinterland of the Shikoku henro

: Religious Tourism and Faith in Kobo Daishi as seen from the periphery

Takehisa KADOTA

Associate Professor, College of Tourism, Rikkyo University

The objective of this paper is to examine the expansion of the faith in Kobo Daishi, a fundamental element for the Shikoku henro, through the example of replicated Shikoku pilgrimage routes in remote areas. The rise in popularity of the Shikoku henro is partially due to the support from people coming as pilgrims from areas outside of Shikoku. The influence of the media causing a boom in the Shikoku henro around 2000 has been pointed out, but in this paper I would like to examine in greater detail the depth over time based on the viewpoint of folklore studies, the creation of replicated pilgrimage routes between generally the end of the Edo period and the present day, and the influence that these routes had on local religious customs. As well, I will demonstrate that the regional expansion of the faith in Kobo Daishi was a factor in getting people to become pilgrims and go to Shikoku. As a case study for this paper I will look at Sado Island in Niigata prefecture. Around the middle of the 18th century a small-scale replicated Shikoku pilgrimage route was created for the first time on Sado and with small changes over time it became widely accepted among the local people. At the same time on Sado customs related to the Shikoku henro were included in funerals and annual events, and as a result a positive image to embark on the Shikoku henro emerged and more people expressed a wish to go to Shikoku and worship at the sacred sites there. In the latter part of this paper I will demonstrate because the faith in Kobo Daishi and customs to this faith that became part of people's lives merged with touristic aspects in the present such as the development of modern regional development phenomenon and the travel business such customs did not disappear and became part of modernity. Pilgrimage research until now has had a strong tendency to use the Shikoku and Saigoku pilgrimage as a model to demonstrate relatively independent regional phenomenon for regional and replicated pilgrimage routes, but in this paper, I have shown that the pilgrimage route on Sado always operated within the network of the faith in Kobo Daishi, a focal point of Shikoku, and there was an inseparable phenomenon between the modern flow towards tourism and development.

1 四国遍路の拡がりを捉える¹

新潟県佐渡島において文化人類学・民俗学の手法でフィールドワークを行っていた際、島内で多くの四国遍路関係の痕跡に出会うことがあった。例えば近世末期から大正期に建造された、西国・坂東・秩父・四国への巡拝を記念した多くの巡拝塔、博物館に収蔵された明治初期～大正時代の表記が入った木製の納め札や草鞋（図1）、文書館に所蔵された江戸時代の四国遍路札所の御詠歌集²などである。また盆行事の際にある家の仏壇を見ると、家人が以前赴いた四国遍路の白衣と御影帳、掛け軸などが掛かってあった。後述の通りこの地域では先祖供養や葬送儀礼にも遍路が関わってくる。



図1 木製の納め札（佐渡市立佐渡國小木民俗博物館所蔵）

このように四国から遠く離れた佐渡でも、生活の端々に四国遍路の存在を確認でき、歴史的深度を持って弘法大師信仰（以下大師信仰と略す）が伝播していたことが伝わってくる。そのことは、離島とはいえ近世末期から信仰の伝播を可能にする交通インフラや情報伝達という社会条件が存在したこと、また旅に出るだけの経済的基盤が佐渡の人々に備わっていたことを示唆する。佐渡における四国遍路は単に、「本四国」と呼ばれる四国それ自体へと巡拝に向かう旅だけではなく、日常に偏在する習俗として、また島内に展開する四国遍路を模した「地方霊場」[小嶋 1987 ; 1997] への信仰としてもあった。しかも儀礼だけでなく日常の語りや意識においても四国遍路はたびたび出てくる、遠い存在ではなかったのである。

小嶋博巳が地方霊場（巡礼）を指して「村落社会の歴史や民俗と深く関わる中で生み出され維持されてきた」と述べているように [小嶋 1997:302]、地方霊場はモデルとなったメジャーな巡礼地に従属した存在ではなく、各地域のローカルな宗教的・社会経済的諸条件に影響を受けた独自性を有する現象である。それと同時に、四国遍路にまつわる習俗が様々な地域に見られることは高野聖の拡大や巡礼者の行き来など [森 2014]³、四国と他地域との間に人と情報のゆるやかな移動性（モビリティ）が常に存在したことを示しており、佐渡のような遠隔地においても大師信仰が空間を越えて広がっていたことを示唆している。

本報告では四国遍路を支える信仰の空間的広がりを捉えたい。特に、大師信仰の中心を四国～高野とした上で、何がその信仰や習俗の持続を支えるのか、佐渡という周辺地域の視点から明らかにすることを目的とする。ここで〈周辺〉とは後進性や未開性を示すものではない。むしろ離島や中心からの距離を文明・未開の図式に置き換える視点自体が近代の都市中心的な見方であり、本論は佐渡が〈周辺〉となり、他地域に人を運ぶ交通機関や情報経路が整備することで巡礼も盛んになっていったという、ある種の近代性のなかで捉えることを目指す。その際四国との関係性は、後背地（Hinterland）という概念で見ることができる。流通・経済的な概念としての後背地は、港湾や物流拠点の背後で供給・消費を行う地域もしくは物流システムを示すが、文化人類学ではこれを都市／農村関係に応用し、都市文明の背後にある持続的対面関係が優勢な家族的集団と近隣集団を核とする小地域社会のことを後背地と称する。阿部年晴によると、「都市的中枢は、物資や労働力のためだけではなく、文化的動物としての人間と社会を再生産するためにも『後背地』を必要とする」 [阿部 2007] ものである。つまり後背地としての小地域社会は都市に従属する文化不毛の地ではなく、都市の胚胎に不可欠な文化的存在だというのである。巡礼研究、四国遍路研究といえば「メイン」となる巡礼地の研究が自明視される中、佐渡の四国遍路関係習俗を周縁的な場所における不完全で従属的なものと捉えるわけではなく、また完全に独立した現象として見るのでもなく、四国との関係性の中で捉える必要がある。以上の視点を踏まえ、四国遍路の持続と拡大を支えてきた後背地の習俗と信仰を考えたい。

2 佐渡における大師信仰と巡礼

日本海に浮かぶ佐渡島は2004年以來ひとつの行政単位（佐渡市）となっている。島として沖縄本島に次ぐ面積を有し、急峻な二つの山脈を広い平野が繋ぐ形をしており、島内には生業も気候風土も多様な集落が広がっている。有数の金産出量を誇った佐渡鉱山（金銀山）を抱えたため、1603年以來天領であった。律令制の「遠流」の地と定められ、流人や孤島のイメージがあるが、実際は近世以來、上方と北方をつなぐ北前船の寄港地で船大工や商人の行き来が激しく、物資や文化の交易地となってきた。とりわけ西からの影響は大きく、島内には瀬戸内海の御影石でできた橋梁や柱、「丸亀」を屋号とする商店などが残っている。しかし交易地としての地位は動力船が中心になる明治後半以降低下し、交通・情報の流れが東京中心的に再編されることで島は周辺化されていった。加えて金銀山の完全閉山（1989年）もあいまって、人口は戦後直後の12万人から半減し、2017年現在約5万7千人となっている。

宗教面から見れば島内に269の寺院があるとされ、真言宗が全体の6割を占めており、大師信仰に基づく遍路習俗が根付く背景となっている。しかし金を求めて人が押し寄せた時代に作られたこの寺院数は、現在の人口からみれば過剰であり、事実無住や兼務が増加しており、残された寺院も檀家が減少し経営状況は厳しい。2002年の河原による調査では269の寺院のうち無住が85に上り、僧侶への調査でも専業という住職は27%に過ぎない [河原 2004]。この調査から16年が経ち、その状況はなお深刻化していると思われる。兼職や多忙な僧侶の増加は地域の宗教的実践に寺院や僧侶の果たす役割が徐々に低下することを意味している。のちに述べるように、巡礼を商品化する旅行社が入り込む余地はこうした環境要因にも支えられているのである。

佐渡には大小様々な多くの写し霊場が古くから存在したことが分かっている。まず、集落単位の小規模な写し霊場に関して、地元の郷土史家・本間雅彦は、延享2（1745）年に旧金井町で小規模な「四国八十八番佐渡札所」が開設され、灰仏を模写して配置したのが最初の写し霊場だとしている〔本間 1986；1995〕。島内には他にも海府遍路、国仲遍路、小木三崎遍路、前浜遍路、七浦遍路、又平遍路、弥左衛門遍路などと呼ばれる近世村並の地理的広がりをもつ小さな写し霊場がいくつもあった〔両津市誌編纂委員会編 1987：800〕。その多くは既に参詣する人の途絶えたものになっているが、高齢者には名称だけが記憶として残されているケースもあることから、交通が未発達で徒歩での生活範囲を容易に越え出ることのできない戦後頃までは廻って歩いた人がいたと思われる（図2）。



図2 佐渡四国遍路の様子
昭和の前半頃と思われる（相川文書館所蔵）

他方、集落規模を越えて佐渡島内全域をカバーする写し霊場もまた整備されていた。淵源は諸説あるものの、文化12（1815）年に旧小木町の僧侶が四国から砂を持ち帰り、蓮華峰寺など島内八十八ヶ寺に奉納して佐渡四国遍路を開創したと伝えられている〔新城 1997：99〕。外周260kmを超える広い佐渡島を網羅した「一国遍路」と呼ばれる巡礼地は事実上これが最初のものであった。その後廃仏毀釈で廃寺が増え、島内全域を廻る大変さから巡礼者も少なく一度は廃れたという。昭和6（1931）年に旧畑野町の明持坊という寺院の住職・鞍立長健によって再興され、再び四国から砂を持参したとされている〔佐渡四国八十八カ所霊場会 2000〕。しかしこれも戦後の混乱で廃れ、1960年代後半に地元で旅行会社を営むT氏という人物が再興を行う。寺院側の動きは遅く、昭和58（1983）年になって「佐渡四国八十八カ所霊場会」が発足し、札所の幟や札番号の同じ四国の寺院の御朱印等を設置したり、ガイドブックを出版したりするようになる。平成19（2007）年には霊場名称から「四国」を取り「佐渡八十八カ所霊場」に改称され（図3）、「写し」からオリジナルな霊場へと発展させようとしている。

このように佐渡の写し霊場は、寺院境内や集落において、交通網の未発達な時代の生活範囲に僧侶や信仰に篤い巡礼者が霊砂を持ち帰って開いたことに端を発し、衰退・統合・再興を繰り返しながら徐々に生活空間を越えた島内全域規模での霊場へと拡大するとともに、従来の小さな霊場が廃れていく動きであると捉えることができる。四国遍路自体が近世中後期になってから隆盛になったがゆえに、それを写した地方霊場は一般に化政（1804～1830）、天保年間（1830～1844）から幕末にかけて多く開創されたとされている〔新城 1997：1129〕。著名な篠栗、小豆島、知多といった写し霊場がもっぱら西日本や四国近辺に分布することを考えると、佐渡における最初の写し霊場が延享2（1745）年に編成されたという縁起は、四国から離れた地にも早くから大師信仰への希求があったことが分かる。



図3 地元の仏具店が作った
「佐渡八十八ヶ所霊場」の幟
（2008年8月、筆者撮影）

3 日常の巡礼習

このように佐渡には写し霊場としての巡礼地が存在し、人々は意図すれば巡拝を行うことのできる環境が整っていた。他方日々の行事や慣習の中にも巡礼にまつわる事象が多々存在し、好むと好まざるとに関わらず四国遍路由来の価値観や習俗に触れる機会もあった〔浜口 1986〕。いわば生活世界に根ざした「移動しな

い巡礼」だと表現できる。大師信仰が習俗に埋め込まれていることを顕著に示すのは、筆者がフィールドで何度も聞いた「四国行ってこんきゃ次のとこ（西国等）行けない」とか、「この辺では昔から、できたら一回はお四国へ行きたいというのがあった」「一生に一回つつつても、一回行くともう一回行きたくなる」「どんな貧乏な家でも四国、高野山、お伊勢参りする」などの言葉である。このように島外の著名巡礼地に向かうことを肯定的に語る言説が流通しており、民俗誌的報告においても「信仰の表現手段として遍路が盛んに行われたことは、島民の信仰生活の際立った特色」[新潟県編 1984:698]とされてきた。

だが実際に近代以前において島外巡礼地に行くことが常態化していたわけではない。実数としての記録はないが、旅日記でも上方への旅行は富裕層にのみ可能な一大事業であり[両津市誌編纂委員会編 1987:754]、これらの言説はある種の理想を表現した言葉であった。それを示すように「四国西国及びびはないがせめて七日の佐渡遍路」[新城 1997]という諺があり、写し霊場は容易ではない旅の代替として機能していたのである。ともあれ四国遍路を理想化する表現が多くある背景には、真言宗寺院が多く信仰行事にも大師信仰や四国遍路に直結していたためだと考えられる。具体的に見ていきたい。

(1) 年中行事として

「移動しない巡礼」を可能とする仕掛けとして年中行事の中の遍路関係習俗を挙げられる。佐渡には「居遍路」「いざり遍路」「ねまり遍路」等と称される「いながらにして四国八十八カ所の御詠歌を唱えることによって遍路の御利益を願う行事」[新潟県編 1984:710]が多くの集落にあった。「ねまる」とは「座る」を指す方言であり、その名の通り寺院で座して般若心経や御詠歌を唱和するだけで四国遍路を行ったと同等の価値を有するとされる儀礼である⁴。当初単なる代替的巡礼だったと考えられるが、近代になると日清戦争・日露戦争の戦没者祭祀と習合しはじめる。島内の著名な寺院・安照寺には、日露戦争を記念した施設「偲異堂」が明治41(1908)年に建設されたが、その施設内に四国遍路全札所の本尊額が掲げられており、ここで戦没者を供養するために「居遍路」を行っていたことが記録に残っている[梶井 2005:67]。ねまり遍路は現在でもいくつかの集落で継続して実施されたり、四国遍路に向いて意欲を持った人が復興させたりするケースが認められる。佐渡西岸の大浦集落では、年に一回3月の第一日曜日に寺に集り、般若心経、1番から88番までの御詠歌を唱える。その時に義民24名の名前や集落の戦死者名を読み上げ、先祖のホトケの供養を行う。同じく近隣の橘集落では3月21日に大師堂で数珠を回しながら真言と御詠歌を唱えるとされている[新潟大学人文学部民俗学研究室 2000:108]。

また似た儀礼として、佐渡島内に点在する「奉納光明真言百万遍」の碑が示すように、真言宗の浸透で広く百万遍の奉納が行われている。北片辺集落では正月20日に年齢関係なく住民が寺で真言を唱える。その際都合で参加できない者は寄付を行い、25歳や42歳(男性)、33歳(女性)などの厄年の者が菓子差し入れする。途中演芸会を挟みつつ一日仕事となるようで、楽しみと信仰の融合した行事であると思われる。

(2) 葬儀の習俗として

冒頭で述べたように、佐渡では盆の仏壇に自らが行った巡礼の用品を並べ、祖先に供える習俗があった。供される品は朱印の押された白衣や納経帳、実際に使用した金剛杖、掛け軸、屏風などである(図4)。この習俗が見られる背景には、巡礼に用いた白衣や杖などを自らが死んだ際、棺桶に同封するという葬送儀礼がある。本人が用意できない場合は近親者が提供することもあるが、それも不可能だった場合は子や孫が仏壇への提示でそれに代えたり、死者供養や戦没者の慰霊目的で御詠歌を唱えたりするなど、死者への追善供養の中で巡礼習俗が展開されてきた。島外に巡礼へ行くことが難しい時代にあつては、死者供養に用いる巡礼用品も四国等の品々ではなく、写し霊場である佐渡四国遍路で用いた品で代用していた。こうした習俗も今や他者から「熱心な人」と言われる一部の人が実行しているに過ぎなくなっている。

加えてこの地域では、入棺の際、通常の上



図4 盆行事で仏壇に置かれた遍路の白衣 (2007年8月、筆者撮影)

にもう一枚、本四国の八十八カ所の白衣を着せる風習がある。これは白い上着の全面に各札所および番外、高野山などの御朱印をもれなく押し、「南無大師遍照金剛」の文字を書き入れたもので、一回の本四国巡拝で一枚しか作成できない貴重なものであるといえる。これがない人は通常の白装束一枚のみであるが、「本当の身内」であれば譲渡しても良いと説明されることがある。例えば親より先に子が亡くなった場合など、よほどの思い入れがない限りは通常では譲渡されない。しかし大浦集落で話を聞いたある女性は、四国遍路への巡拝で自分が作成し持ち帰った白衣を、早世した友人のためにあげたと言っており、親族関係やつきあいの範囲で譲渡範囲が必ずしも決まるわけではないことが分かる。白衣は遺体の上にそのままかぶせるだけの場合もあり、いずれにせよ遺体とともに火葬される。なお、納経帳などその他の遍路で用いた品は特に棺に入れる決まりはない。

人が亡くなった後、かつては家で湯灌をしたが、その際「ホトケさん」と葬列参加者の間に屏風を置いて、湯灌の様子などを大勢の人の目からは避けられた。葬儀を通しこの屏風は立てられるが、湯灌で体を清めるのは主に身内（親兄弟）の役割である。一方屏風の反対側では女性たちが念仏をあげることとなっている。ただし念仏と言っても、佐渡では念仏と真言が観念上混同されており、「おんあぼきゃべい…」の真言を「くる」（唱える）ことも「念仏をあげる」と称されることが多い。この際の屏風に関し、大浦集落では部屋の仕切のために必須とされ、もし自宅になければ誰かから借り受けることとなる。このとき本四国の遍路に行つて作った屏風を使うと大変に「ありがたい」と言われることが多いという。また、その屏風を他人に貸し出したりすると感謝され、参列者からは「(故人に対し) ああ、こんなことまでしてもらって」と喜ばれると言う。大浦集落のある男性が本四国に行ったときに作成した屏風は、縦1.5メートルほど、幅は通常通り広げただけでも3メートル近くに及ぶ。金箔の上に納経帳からいくつかの札所のページを切り張りしたもので、金額も高額となる（この男性の場合は30万円近くとのこと）。その他、葬儀の時は部屋に掛け軸がかけられるが、これも四国八十八カ所の御朱印を押ししたもののが好まれる。葬儀に際しては、生前本四国巡拝と一緒に巡拝した仲間が「遍路仲間」ということでまとめて香典を出したり、その人たちが念仏（真言）を唱えたりする事もあったという。次に述べるように四国遍路の旅仲間は終生に亘って付き合い続ける結束を持ったのである。

(3) 通過儀礼として：集落における集団での巡拝

いわゆる巡礼講は伊勢や善寶寺などへの集団参詣や代参を可能とする仕組みで、佐渡でもかつては多数存在したが、四国遍路のために結成された事例はあまりないとされる [蛸島 1986:754-760]。それは島内の写し霊場や年中行事での遍路関係習俗が代替的な役割を果たしていたからだと考えられる。ただし講という形式は取らないでも小集団で遍路に出向く事例は見られ、調査報告によると佐渡北部西岸の北片辺^{かいたべ}・南片辺集落ではドウシャ⁵と呼ばれる同年齢集団があり、上方参りと称し、四国、西国、高野山などに巡拝に行くことがあった。この地域ではもともと旧制の高等小学校卒業時になると同じ年齢の気の合う仲間（モンテ）と結成するワカイシュヤドと呼ばれる集まりがあった。民俗学で若集宿、若者宿と呼ばれるかつての習俗である。メンバーの家を借り、夜な夜な集合し雑談をしたり、宿泊をしたりすることもあった [小熊 1986:157]。ただしワカイシュヤドは結婚や他出により徐々に自然消滅していく一時的な集合体であったが、ドウシャは永続的なもので、男性なら家督を継いだ頃合い、女性なら子供の世話が終わり主婦権を姑から引き継いだ頃合いに、同程度の年齢の者が集まって結成されるものである。「オヤジやカカになって長年働いた末に、ようやく役がなくなってから、再び凝集される同輩集団」であり、「南片辺に一生暮らすことが確定した者たちによって、再編成される同輩組織」とも称される [岩本 1992:185]。

そのドウシャが結成される一つの契機となるのが上方参りである。北片辺集落では「一生に一度は借金をしてまで上方参りをしなくてはならない」と言われ、女性の場合「一生に一度の嫁ぎ先からのお礼」ということで、嫁ぎ先から資金を得て旅行に行くことが慣例となってきた。筆者が2002年にインタビューをした当時70代後半の女性の場合、ちょうど上方参りの時は新潟に住んでおり、秋頃に佐渡から来たモンテと新潟のホテルに宿泊し宴会をした。その後、モンテの一行は夜行で関西・四国に行き、遍路、高野山、金毘羅、伊勢を参拝して廻った。「団体旅行が嫌い」で「変わり者だった」彼女だけは新潟で宴会に付き合っただけで巡礼旅行には行かなかった。上方参りから帰った一行はゴチソウを食べ、以降特定の名前を冠したドウシャを結成して今に至るといふ。上方参りは家族、特に息子が資金援助をしてくれるとはいえ、相応の出費であ

るが故に彼女のドウシャでは頼母子講をつくり、若いころから計画的に資金を貯蓄していたとすることである。ゆえにドウシャとは上方参りを契機に新たに作られる集団であると言うより、ある程度の輪郭が段階的に作られていく。その各段階には宗教的・娯楽的行事が見いだせるのであり、最初の行事は19歳と33歳に行われる厄年の祝いだという。上記の女性の場合、19歳の時に同年齢の者と集まり街場（相川）の金刀比羅神社に参詣に行き、その後バスで島の中心（佐和田）の写真屋まで記念撮影に行き、再び相川に戻り宿泊し帰宅するという「修学旅行」的なものであった。近年では老人クラブでも本四国へ行くという話がでる。そのような状況の中で前出の彼女があえてそういったものを好まず参加しなかった背景には「信仰なんてのは好きじゃない」うえに「念仏が好きじゃない」という確固たる信念があり、ドウシャとはいえど必ずしも全員参加で行われるわけではないのである。

以上本節で見てきたように、大師信仰や四国遍路に由来する習俗や価値観は日常生活の端々にその片鱗をのぞかせており、「一度四国へ参りたい」という広く共有された望みとともに、年中行事的に執り行われる各種信仰行事を通し、遍路への回路が開かれてきたと言える。つまり、御詠歌や真言を唱えそれをいつの間にか覚え、葬儀があれば掛け軸、屏風を目にし、また寄り合いなどに行くことと遍路の体験談に接する機会があり、そのような過程を経て人々がゆるやかに共有する「一度四国へ参りたい」という意識の輪の中に自らも徐々に加わっていくのである。その共同意識は多くの人を遍路へと駆り立てるものとなっている。本報告では遍路にまつわる事例をあげているため、自ずと遍路に対して積極性を持つ人の話を中心となってしまう、結果的に佐渡において遍路への希求が誇張されて表現される可能性はある。しかしインタビューをしたなかでも「なんも興味がない」と述べる人は何人もいた。そう言った声を拾っていくことで見えてくる遍路像もまたあろうし、決して見落とすべきではない部分であると考えられる。

村落生活に埋め込まれた習俗としての巡礼は、移動よりも読経や知識に主軸を置きながら、日常生活に埋め込まれていた。古く人類学において巡礼とは非日常性のもとにある宗教的实践として描かれてきた。しかしそれは社会構造に対立する部分のみを焦点化した捉え方であり、ここで述べたように巡礼に内在化する規範意識や知識・作法が日常生活の場としての共同体にストックされていることは看過し得ない。

4 ツーリズムの時代と巡礼

(1) 佐渡の島内交通の発達

前章までに述べた儀礼としての大師信仰や遍路習俗は生活世界に埋め込まれた、いわば前近代的な姿の残滓である。しかし近代は巡礼を移動性の中に接合させ、特にツーリズムとの邂逅はその形を大きく変容させることになった。ツーリズム（観光）は場所と移動をめぐる、情報の創造と消費である。それを可能にするのは交通機関や路線などの移動のためのインフラストラクチャーであり、旅への動機を喚起し旅行情報を流通させる情報ネットワークの整備である。その社会条件がそろい、かつ可処分所得の増加で人々が移動という手法において楽しみや観覧の欲求を果たしたいという、消費社会の到来があつて初めてツーリズムが成立する。高度経済成長下で大衆化する観光は、一部の特権階級から多くの一般の民衆にまでこれを可能にしたことで、巡礼を含む「文化」もまたツーリズムの中に組み込まれていった。

近代において佐渡と日本本土とのあいだで労働や用務以外の交通往来が盛んになったのは、1920年代に端緒を見た日蓮聖跡巡礼旅行団である〔相川町史編纂委員会 1971:584〕。島内には日蓮が流された関係による旧蹟が多数あるため日蓮宗信徒が大正末期より多数訪れるようになり、それと前後して佐渡の名勝史跡を解説したパンフレットやガイドブックが地元出版社や旅館から発行されるようになる⁶。1910年代～20年代には客馬車、乗合自動車などが設立され、公共交通網が徐々に整備され始める〔新潟交通二十年史編纂室編 1966〕。1930年に佐渡観光協会が設立され、1934年には海外府海岸が国指定名勝天然記念物となったことで観光地開発が進んでいく。こうして昭和10年代には近代観光というナショナルなコンテクストに組み込まれ、島が「外部」のツーリストのまなざしに晒されることになる。四国では昭和初期に鉄道・バス網が既に最低限揃い、それを利用した巡礼者が姿を表していたが〔森 2014〕、佐渡では交通網がまだ網羅されるには至らず、戦前は未だに小舟による海路が集落間移動や流通の中心だった〔北見 1986:372-373〕。ゆえに島を一周する写し霊場も小舟や徒歩に限らざるをえず、到底旅行気分で行うような状況にはなかったと思われる。つまりこの段階では佐渡の人々にとっても巡礼はツーリズムではなく、未だ生活に埋め込まれた信仰的な習俗であった。

(2) 信仰と観光の融合：巡礼のツーリズム化

先述の通りこの写し霊場は戦後の混乱期に荒廃するが、これを再興し、ツーリズムと巡礼とを接合させたのは、1960～70年代の国内観光ブームという社会的潮流に乗って興った地元旅行会社S社である。S社は小規模家族経営の会社ながら当初ホテル業や賃貸業などを行っていたが、1960年代に創業者のT氏が荒廃していた佐渡四国遍路に着目し、各札所や経路を調査し、昭和37（1962）年に佐渡四国遍路のガイドブックを地元で出版した。そのことをT氏は「眠っていた佐渡四国に灯をともした」と称している。この過程でT氏は8ヶ寺の札所を入れ替えて「佐渡新四国霊場」と改称するとともに立て札や納経帳を用意し、昭和42（1967）年に30数名の客とともに巡拝したことを皮切りに、自社の旅行商品の一種として巡礼ツアーを行うようになった。加えて昭和57（1982）年には「佐渡西国三十三番霊場」という、西国三十三番巡礼の「写し霊場」を発起人となって開いている。島内の各集落に呼びかけ、33の堂を札所に指定し、案内看板や旗を設置したりそれぞれの由緒を定めたりしたのち、巡礼ツアーの一つとした。後に巡礼ツーリズムに専門化したS社は島内の巡礼地でのツアーを行うことと、島外の著名巡礼地に佐渡や新潟在住者を引率するという2つの大きな柱を持ってきた〔田中 1962；1987；1996〕。

S社は佐渡における大師信仰や四国遍路を一種の文化資源として発掘し、佐渡へのリピーター獲得を謳って「巡礼を通じた地域発展」「佐渡百万人観光」（T氏）を標榜してきた。同時に彼はまた四国遍路にも巡礼ツアーを引率し、生前104回の巡拝を達成した「大先達」であったが、佐渡から四国へのツアーを行うことで、インバウンド（本州から佐渡へ）とアウトバウンド（佐渡から四国へ）双方で巡礼のツーリズム化を促してきたと言える。事業としての巡礼は組織化と広報にも表れており、ツアー経験者を「れんげ会」として同好組織に構成し、ダイレクトメールを定期的に送付している。

しかしS社のおもしろさはこのような巡礼のツーリズム商品化それ自体にあるわけではなく、同社が収益事業にのみ還元できない行為、例えば本社脇に寺院を自費で建立したり、前述の遍路関係習俗「ねまり遍路」の形式を踏襲した御詠歌の練習会を定期的で開催したり（図5）、ダイレクトメールも広告の色彩はとらず参詣の報告や参加者の体験談を中心としているなど、「観光ではなく信仰の旅であるというポリシー」（現社長）を前面に出した巡礼ツアーを展開している点である。S社の巡礼ツアーはあくまで事業ではあるが、引率者は「公認先達」資格を取得し、宗教面での指導も行う。筆者は以前同社の四国遍路ツアーの参与観察を行い、ツーリズムの構造を持ちつつもツアー客＝巡礼者がそれを遊びや観光として受け止めるのではなく、あくまで信仰の旅だという自己認識を持ちうる微細な仕掛けを民族誌的に記述した〔門田 2013〕。S社の視座は信仰か観光か、どちらか一方を重視し、もう片方をそのための資源だと捉えるものではない。地域活動や巡礼ツアーの構造は「結果的に」新規顧客の獲得に繋がっていることも含まれているが、経営のみを考えると不要な要素も少なくない。佐渡の人の中にはこの御詠歌練習会を「念仏大会」と捉え、それに出るために知人と家で練習をして臨んだという話も聞かれた。つまり創業者のT氏や現S社にとって、大師信仰に基づいた実践を行うことと事業として旅行会社を営むことは一体化しており、大師信仰を広め写し霊場を再興することが観光に繋がり、観光客の増加が信仰の拡大に寄与していくというように、相互補完的なものとして捉えているのである。

(3) 霊場会の意識

以上のようにツーリズムの観点から巡礼に着目したS社は、単なる営利組織というよりも疑似的な宗教組織の様相を呈する。僧侶などプロの宗教者抜きに宗教的実践を可能にしているのは、佐渡にもともと埋め込まれていた大師信仰や遍路習俗であり、それをツーリズムという現代的な仕組みと合致させたことで人々の支持を得たのである。宗教研究の観点から言えばこれは決して特異な現象ではなく、大手旅行社の起源が御師にあって〔中西 2008〕、上座仏教社会の僧侶が都市住民のライフスタイルに合わせて「経営」されていたりと〔藏本編 2017〕、類例も多く比較検討の可能性



図5 S社主催の御詠歌練習会（2011年1月、筆者撮影）

がある。

いずれにせよS社は佐渡の人々を四国遍路へ導き、それに伴って佐渡島内における遍路習俗や写し霊場も再活性化していったが、他方で霊場整備としては後発となった島内の霊場会とはやや距離があると言える。前述の通り霊場会は写し霊場の名称を改め、霊場の独自性を高め盛り上げていこうとしているが、その名称はS社が用いる「新四国」という名称とは異なっている。要するに、同じ島に「プロモーター」によって異なる名称の霊場が二つ併存している状況である。霊場会はS社に対して写し霊場復興の恩義を感じてはいるが、他方で「外部」からやってきた組織が「勝手に」復興させた、と表現する僧侶もいた。両義的な認識を持つのは年配の僧侶であるが、一個人によって写し霊場としての佐渡四国遍路が再興されたことが、「世間」の狭い島の言論空間を刺激したのだと思われる。

4 おわりに：代替巡礼地から自立した巡礼地へ

本論で筆者は、佐渡においては近代初期まで四国遍路にまつわる様々な儀礼や観念が生活世界に埋め込まれており、巡礼経験といった場合必ずしも「本四国」への身体的移動を伴わなくとも達成できたと述べた。その具体例として、地域内に複製された写し霊場での代替的巡礼行為や年中行事として行われてきた「ねまり遍路」、あるいは葬送儀礼での習俗を取り上げた。これらの代替物は大師信仰の空間的拡大とともに四国から離れた遠隔地において四国遍路への希求が生じながらも、実際には交通や金銭面で容易に実行できないものであったため、その信仰的モチベーションを埋めるような役割を果たしていたと考えられる。「周辺」にありながらも佐渡が四国遍路や大師信仰を支える後背地だと言っている根拠は、このような状況下において四国という土地自体がある種理想化され憧憬の対象となっていたからである。

しかし小規模な写し霊場やねまり遍路などの儀礼は戦後の生活変化で廃れつつある。現在佐渡で観察できる巡礼関係の習俗の多くは、地域の文化資源として再発見され装いを新たにしつつある地方霊場であったり、ツーリズムを介して四国遍路に関わる人だったり、かつてのように生活世界に埋め込まれたものとは言いがたいものになっている。とりわけ地方霊場は意味づけを変化させており、20世紀半ばまでの時代、佐渡四国遍路など島内のいくつかの写し霊場は遠くて足の及ばない本四国の代替霊場であったが、ツアーを介して比較的容易に四国遍路に行くことのできる現代にあっては、何人かのインフォーマントが筆者に答えたように本四国への巡拝を終えた後の「お礼参り」として廻るものになっている。「佐渡四国遍路」が「佐渡遍路」へと名称変更されたように、それは四国の代替ではなく、独立しオリジナリティを有する「自立した巡礼地」へと変化しつつあると言えよう。そのオリジナリティは、佐渡の行政や旅行会社にとっては地域の「誇るべき伝統」であり、かつ霊場会にとっては檀家の減少や仏教への関心が低下する状況下において、寺が社会とつながる希少な接点だと捉えられている。このように地方霊場に関わるアクターの立場によって、多様な意味づけと解釈が重ねられる状況になっているのである。近藤隆二郎は旧来の地方霊場が地元のクローズドな関係の中における共有（コモンズ）であったという視点で、現在はこれに外部からも新たなゲストがオープンエンドに入ってくるようになり、それに合わせた新しい管理システムが構築されているとし、ホストとゲストが資源としての巡礼地をめぐるともに「演じる」という意味で、共有から共演へと変化していると述べている [近藤 1999]。佐渡の地方霊場もまさに同類のものとして捉えよう。

そうすると必然的に、四国遍路の後背地としての姿もまた変容していかざるをえない。既に四国自体が到達することの容易ならざる遠い聖地ではなく、人々の現実的な選択肢になっている現在、〈周辺〉はかつてほど劣位に置かれているわけではない。そこから見れば四国遍路とは、日本各地に多々広がる様々な地方霊場「モデル」として規範を与える存在というよりも、多数の地方霊場とフラットな関係を持ちつつもそれらを繋ぐハブ（結節点）になりうるものだと捉えた方がいいだろう。

註

- 1 本論は門田 [2002 ; 2013] を元に加筆修正したものであり、一部記述が重複する。
- 2 小池勝家文書「八十八ヶ寺札所」相川文書館所蔵。
- 3 森は弘法大師信仰の拡がりをそのほか御遠忌 850 年（1687 年）前後の遍路隆盛にも求めている。
- 4 「遍路をする」と言った場合は「ねまり遍路」を意味し、「遍路に出る」と言った場合は実際の巡礼地に出向くことを

意味する。

5 同者、同社、同舎などと字を当てられる場合もある。

6 代表的なものとしては、佐渡水産組合編『佐渡水産組合編纂 佐渡案内』[1909]や浅香寛『佐渡案内 順徳天皇御遺跡案内』[佐渡日報社、1923]が挙げられる。当時のガイドブックは佐渡市各自治体の名所旧跡、産物、宿泊の案内のみならず、気候や歴史、風俗習慣、言語、産業、宗教にまで及ぶ広い記述を行っており、さながら地誌の様相を呈している。

【参考文献】

- 相川町史編纂委員会編 1971 『佐渡相川の歴史 通史編 近・現代』、相川町
- 阿部年晴 2007 「後背地から…」阿部年晴・小田亮・近藤英俊編『呪術化するモダニティーアフリカの宗教的实践から』、風響社
- 岩本通弥 1992 「イエとムラの空間構成」『国立歴史民俗博物館研究報告』43:145-192
- 小熊誠 1986 「年齢集団」相川町史編纂委員会編『佐渡相川の歴史 資料編八 相川の民俗 I』、pp. 129-170、相川町
- 梶井照雄 2005 「徳異堂の設立事情」『第20回全国天領ゼミナール記録集』、pp. 65-82、全国天領ゼミナール事務局
- 門田岳久 2004 「佐渡・巡礼のこととその周辺」岩本通弥・中村淳編『佐渡・相川—観光文化とローカリティ (2002年度東京大学文化人類学研究室社会調査実習報告書)』、東京大学文化人類学研究室
- 門田岳久 2013 『巡礼ツーリズムの民族誌—消費される宗教経験』、森話社
- 河原健太 2004 『佐渡島のお寺の新しい活用に関する研究』、横浜国立大学大学院環境情報学府修士論文
- 北見俊夫 1986 「陸の道と海の道」相川町史編纂委員会編『佐渡相川の歴史 資料編八 相川の民俗 I』、pp. 369-414、相川町
- 藏本龍介編 2017 『南山大学人類学研究所公開シンポジウム講演録 「宗教組織の経営」についての文化人類学的研究』、南山大学人類学研究所
- 小嶋博巳 1997 「利根川下流域の新四国巡礼」真野俊和編『講座日本の巡礼三』、pp. 274-321、雄山閣
- 小嶋博巳 1987 「地方巡礼と聖地」桜井徳太郎編『仏教民俗学大系 3』、pp. 249-264、名著出版
- 近藤隆二郎 1999 「コモンズとしての写し巡礼地」『環境社会学研究』51:104-120
- 佐渡四国八十八カ所霊場会 2000 『佐渡四国札所 霊場案内』、佐渡四国八十八カ所霊場会
- 新城常三 1997 「近世に於ける地方霊場の発達」真野俊和編『講座日本の巡礼三』、pp. 81-107、雄山閣
- 蛸島直 1986 「念仏講と家の神」相川町史編纂委員会編『佐渡相川の歴史 資料編八 相川の民俗 I』、pp. 743-769、相川町
- 田中茂 1962 『佐渡新四国遍路』、佐渡観光社
- 田中茂 1987 『佐渡西国三十三番案内書』、佐渡観光社
- 田中茂 1996 『佐渡新四国案内 一心』、佐渡れんげ会
- 中西裕二 2008 「旅行業と宗教—日本の観光の原風景として」『交流文化』7:36-39
- 新潟県編 1984 『新潟県史 資料編 23 民俗・文化財 2 民俗編 II』、新潟県
- 新潟県編 1987 『新潟県史 通史編 6 近代第 1』、新潟県
- 新潟交通二十年史編纂室編 1966 『新潟交通二十年史』、新潟交通株式会社
- 新潟大学人文学部民俗学研究室編 2000 『橋の民俗』、新潟大学人文学部民俗学研究室
- 浜口一夫 1986 「人の一生」相川町史編纂委員会編『佐渡相川の歴史 資料編八 相川の民俗 I』、pp. 287-359、相川町
- 本間雅彦 1986 「信仰」『海府の研究』、pp. 192-231、両津市郷土博物館
- 本間雅彦 1995 『赤玉部落誌』、赤玉部落誌編纂委員会
- 森正人 2014 『四国遍路—一八八ヶ所巡礼の歴史と文化』、中央公論新社
- 両津市誌編纂委員会編 1987 『両津市誌 上巻』、両津市